

## 「ディスレクシアとは」

特定非営利活動法人 エッジ

会長 藤堂 栄子 氏

皆さま、こんにちは。

NPO 法人エッジの藤堂と申します。

今日は、1 時間半いただきまして、「ディスレクシアとは」ということ、そして「その困難さとそれに対するソリューション」には何が有るんだろうということについてお話させていただきます。

ほとんどの方は、初めてお目にかかる方だと思いますので、今日みたいな機会を作ってください IBM の方達にまず感謝したいと思います。ありがとうございます。

「ディスレクシア」という言葉を「これまで聞いたことがあった」・・・今日来るというので調べた方は別にして、「聞いたことがあった」という人、手を挙げていただけますか？  
すごく嬉しいですね。ほとんどの方が手を挙げてくださいました。

私は 1999 年後半に「ディスレクシア」という言葉をはじめて聞きました。

その頃、ディスレクシアという言葉を知っている人はほとんどいませんでした。お医者様で、途中障害、脳挫傷や脳梗塞をおこして、左側の脳の言語野のあたりに問題が起きた方をディスレクシアと医療で呼んでいた、それが「失読症」ですね。

読めていたのが、読めなくなってしまったのが、「失読症」。そういう形での紹介しかありませんでした。

息子が 15 歳で、イギリスに行きまして、それまで大変な思いを日本でしていましたけれども・・・イギリスで、「ディスレクシアではないか」と言われました。学校から手紙が来ました。

その時の言われ方が、私の人生を変えています。

なんと言われたかといいますと、

「彼はすごく頭が良い。インテリジェント。そして、コミュニケーション能力もすごくあるのに。話すことはできるのに、どうしてか、読み書きが進まない。英語での読み書きが、どうひいき目に見ても、うまくない。これはディスレクシアかもしれない、そう信じるに足るだけの証拠を私達は持っています」と。

そこら辺は日本でも言われることだと思いますが、そこから先が違うんですね。

「今、気づいてよかったですね。もし、彼がそうだとわかったら、私たちにはいろんな手だてがあります。それによって、彼が、本来持っている能力を、十分に発揮させてあげたいと思う。そのためには、検査をさせてくれませんか」と言う風に向こうからアプロー

チされました。

そう言われてみると、日本の小学校に通っていたころに「お宅のお子さん、読み、遅いんですよね。漢字全然覚えられないけど。自宅学習もっとさせてください」というのは随分言われました。

他にも、「ちょっとどっかで調べてもらったほうが良いんじゃないですか」ということは言われたことはありません。

でも、言われ方がいかにも、「お宅のお子さん、障害者ですよ」。

でなければ、「家庭教育、ちょっとどうにかしたほうが良いんじゃないですか」、または躰の問題とされました。「親の躰はどうなっているんですか」という語り掛けでした。

でもイギリスは違います。

「もし彼がそうだと判ったら、彼の能力を生かしてあげられる。」という話を聞きまして、私は、もう、一も二もなく、「お願いします」と言いました。

検査の結果がわかった時がまた違うんです。

「おめでとうございます！」大当たりなんですね。

「一等賞！」という感じで。

”No Wonder He is Bright”なんですね。

「おめでとうございます！やはり、彼がすごく頭がよくて、キラキラしているのは、ディスレクシアのお陰だったんです。

でも、読み書きができないということは、勉強する上で非常に困難を伴います。不便です。

だから、私たちはこういう支援をします」と言って。

いろいろな支援が始まりました。まず、はじめにタッチタイピングです。

そして、いろいろな教科の教え方を変えてくれました。

それから、教科の内容を、彼がなりたいものをヒアリングしてくれていました。

彼は建築家になりたいと言っていましたので、建築に関係する分野での勉強をさせてくれました。

物理でしたらば、橋の強度ですとか、社会でしたら都市の成り立ち。文学でしたらば、建築家、フランク・ロイド・ライトの一生についてだったりです。

全て彼の興味のある分野に向けてくれました。

今彼がどうなっているかと言うと、25歳になりました。建築家の卵になりました。この前、10月の12日と、11月の12日、NHK総合のNHKスペシャルで「読字障害」という番組をいたしましたけれども、それに出ていた日本人は我が子でございます。

彼を、私は「天才」と言って育てました。それが良かったなと今は思っております。

そんなことで、NPO をすることになりました。

NPO が何をしているかについてだけ、ちょっと、簡単に申し上げます。

一つはキャンペーンをはって、ディスレクシアについて知っていただく、ということをしております。

16 日にもシンポジウムを学研と協働いたします。ホテルオークラでの絵画展、それから広島 LD 学会にも出席いたします。

次に支援ということで、DX 会。

この後話す 2 人の人は、DX 会という、大人の人たちが、自分たちの能力って何なんだろうってということを見つめて、褒めあって、楽になって行こうという会をしております。

また、子どもたちに対してのクラブもしております。

もう 1 つは行政(港区)と一緒に協働いたしまして、「学習支援員」という制度を作りまして、育成をして、公立の小・中学校に送り込んでいます。

それによって、通常のクラスの中にいる発達障害のお子さん達が、自分たちの能力を発揮できるように。

イギリスで我が子が受けたような支援を、普通に受けられるようにという思いで行っております。

これから私、博報賞をいただくために中座いたしますけれども、やっと、自分が認められたということよりも、「ディスレクシア……読み書きの障害というのがある」ということがわかっていただけたのかなという意味で、大変嬉しく思っています。

最後に、ネットワークを作るというのもありまして、「JDD-Net」という発達障害を持つ人たちの支援をするネットワークを組んでおります。

もう 1 つ、支援の中には、IBM などの企業と協力して、ディスレクシアの人たちが使いやすいものを一緒に開発するお手伝いをしております。

では、本題に入ります。

(資料2)

「ディスレクシアな有名人」をご覧ください。

コピーライトの問題いろいろあるかもしれませんが、ここに出ている方は、どこかの文献で、きちんと、本人が「読み書きが大変でした、学校で苦労しました」という人たちばかりです。

ただ、彼らは、読み書き以外の分野で、ものすごく活躍しています。

スポーツ、芸術、俳優ですとか、建築。

そして、もう1つ挙げなくてはいけないのが、アントレプレナーですね。企業家。  
普通の人とは違う考えをもつことができる。発想力で勝負をしている人たちです。

(資料3)

「ディスレクシアとは何ぞや」、という定義をしなくてはいけないと思うんですね。

「読み書き」の障害、「読み」の障害ですけれども。

教育的には、「知的には標準並みにあるのに、読み書きに特異的なつまづきや困難  
さが見られるもの」とあります。

医学的には、また、違う定義があります。

英語圏では、10%以上いると言われていました。

日本語では、今まではいないのではないかとされていたのが、5%はいるというこ  
とがわかってきました。

まだアセスメントがきちんとできていません。どうなのか、というところが判らない。

私を見て、どこが障害か分かる方、いらっしやいますか？

口が裂けても言えない？後が怖いから？と言うことでしょうか(笑)

色が黒いとか、口が悪いとか、片目に近視と乱視と遠視が入っているとかあります。

でも体は、誰と比べるかですけれども、内臓も含めて100%健康です。

どこも悪くない。

頭が悪いんですね、頭の機能が悪いです。

左側のこら辺の脳のところが、きちんと作動していないようですね。

そのことに気づいたのが、息子の事を調べるうちに、私にもあるなということが分かり  
ました。

でも、皆様が見て、私のどこが障害か分からない、というように一見分からないものな  
のです。

そして、私、慶應義塾大学を出ております、北城さんと一緒なんですけれども。

慶應は素晴らしい学校ですね。私のような者でも入れてくれて、卒業させてくれていま  
す。

何が問題っていうのが、見えない、見た目では分からないというのが、一番の障害だと思  
います。理解してもらえないんですね。

ただ、私には隠れ蓑がございまして、帰国子女です。

だから日本語の読み書きできなくても、みんな、「しょうがねえなあ」と言ってくれて。

大学の教授も、卒論に平仮名ばかり使いましたが、後から漢字を書き入れてくれました、卒業させてくれたりしました。究極の支援だと私は思っております。どうして帰国子女には出来て、ディスレクシアの人にはしてもらえないのか、と仰うことですね。

もう1つは、読み書きの障害が、マスク……つまり、見えないようにされている部分としては、他の障害も一緒に持っていることが多いんですね。

特に発達障害と言われている、ADHD、多動だったり記憶、注意が散漫だったり、それから、自閉的な傾向、こだわりが強いというようなことがありますと、社会性の問題や行動の問題のほうが前に出てしまって、読み書きの問題は本人の努力不足で片付けられてしまうことがあります。

もう1つ、治るのか、という問題です。

この前「病(やまい)の起源」という番組だったので、ちょっと、プロデューサーに文句を言ったのですけれども、「病(やまい)」じゃないんですね。罹ったわけではない、伝染病でもない。

それから、障害なのかというのも、自分でも分からない。

何か違うというのは分かるが自分でも分からない。

「治るんですか？」と言われます。

「治る」という人もいて、その人たちは訓練をさせますが、でも行き過ぎるとそれは虐待に繋がります。

大変さの軽減はできる、またいろいろな機器を使って、楽になることはできます。

でも読めないということが、そんなに大変なことなのか。

たかだか文字というのは、ここ4千年の人類の歴史の中で出てきたものです。

そして地球上で文字を持っている言語は、本当に数えるほど。

それが出来ないからと言って、バカにされたりすることはないと思います。

もう1つの問題は、1人1人違うということ。

「読む」というのは、文字を形として認識し、音とマッチングする、単語として認識する、文章として認識する、そして意味を理解する、という所まで行って初めて読めたことになります。

でも、学校では1つの文字を書くとか読むことに、力を入れすぎてしまって、コンテキスト、文章を楽しむところまで繋がっていないのではないのでしょうか。

正確さとスピード、スピードがないと忘れてしまい、流暢さに繋がらない、そしてそれができて理解に繋がります。

(資料4)

我が子が、こんな風に見えていると言います。

彼は空間認知が自在なんです。つまり、いろんな所に飛んでいってしまう。

その上、こんな画数の多い、魑魅魍魎(ちみもうりょう)とか憂鬱(ゆううつ)などと書かれてしまうと分からないし、書けない、写せない。

特に板書ができないのですね。

(資料5)

もう1つ、彼がこんな風に見えている、と言います。彼の言葉を借りると「摩天楼のように言葉、文字が刺さってくる」といいます、それを黄色いフィルターを置くと平屋になると言います。

(資料6)

メカニズムとして、さっき申し上げたことなのですが、多くの方は「音と記号と意味」というのが普通に繋がる。

その中に記憶というものがあって、皆さんは瞬時にサーッと本を読んでらっしゃいます。文字を読んでらっしゃいます。

人間の脳は素晴らしいという話がさっきありましたが、これを見ても分かります。

その中で、音と記号が結びつかないと、これは読めないことになります。

でも漢字だと記号と意味が繋がっていますので、読めています、意味はとれている。

音を介さずに、日本語の漢字を使うと読むことができる。

音と意味が繋がっていなかったらどうでしょう？耳が聞こえない方と一緒にですね。

そしたら目で見せてあげればいいのです。

意味と記号が繋がらない。そしたら音で聞かせてあげたらいいのですね。

(資料7)

読みの特徴です。たどたどしい読み方ですとか、似た音や形を間違う、順番を間違うなど。

私など、電話番号を聞いて復唱しながら書き取っても、かけてみると、全然違う方にかかってしまったりします。

音も飛ばしたり、似た音や形を間違ったり、順番も間違い、電話番号も聞き間違ったり、そして書き間違う。

(資料8)

教育の場ということで、「読めない」というのはどういうことか。

情報へのアクセスが限定されてしまいます。

最近では発達障害の人に対して、形を変えて教科書を供与できるようになり、素晴らしいことだと思います。

他の方法で情報を組み入れてやればいいわけですね。

本来の実力が発揮されない。時間がかかると、「分かっていないんじゃないか」となってしまう。分かっているのに、それをうまく出せないんです。で、本来の能力を相応に評価されない。

豊臣秀吉が朝鮮に行ったんだということを知っていたとしても、平仮名で「とよときひでよし」となってしまったとしたら、まず、小学校6年生であつたらペケです。

まず、漢字で書きなさいと。そして、残念ね「とよとみですよ」、と言われてしまう。

よくて減点です。

平仮名さえも書けなかったら、この人は、戦場のイメージまで分かっているのにもかかわらず、×です。

口頭試問に変えてあげたらどうでしょう。絵で見せてあげたらどうでしょう。多分、この人がちゃんと理解しているということが分かるのではないのでしょうか。

何よりも周囲の理解がないということで、間違っただけを強要されることが多いです。

漢字が書けないと、「100回書きなさい。」

100回書いても覚えられないものは覚えません。

虐待、…保護者が苦悩した結果、虐待に近い状態というのは一杯あります。

クラスからはじかれる。からかわれる。

こういったことの結果として、自己評価が低下します。そして、学校に行きたくない、ご飯が食べられない、朝起きられないという状態が出てきます。

(資料9)

ではどんな支援が必要でしょうか。

「合理的配慮」をしましょうというのが、国際的に合い言葉になっているかと思います。視覚障害者にとっては、耳からのガイダンス、とか拡大教科書というものがあります。杖もあります。

聴覚障害の方は、手話ですとか文字によるガイダンス。先ほど、いろいろな機器も出てきていました。

肢体不自由の方にとっては、車いすですとかスロープですとかがあります。

(資料10)

私たちディスレクシアを持つ人にとっては何かと云ったら、まず、環境の整備だと思います。

音を聞き取りやすいような指示にしてくれ、それから環境を整えてくれと。

それから、目から入る情報、これも、色を工夫するとか、明るさを工夫するとか、それから見せ方を工夫して下さい。

支援機器もいろいろあります。ローテクですと、ただの定規 1 つでも助かることがあります。

ハイテクは、これからあと、IBM さんがいっぱい考えてくださるかなと思います。

理解、これが一番大事だと思います。

本人ができないことばかりに目を当てないでください。

できることがいっぱいあるんです。

毎日一生懸命やっていることがありますので、そちらに目を付けて、そこを伸ばしてあげてください。

そうすることによって、「脳の可塑性」という話がありましたけれども、脳は発達します。

(資料11)

最後に、What's Dyslexia というので、これは息子が作ったものですが。

息子には、文字に色が見えるそうです。

それと、空間認知がよすぎて、自在に動いてしまうそうです。こういう子たちにどういう風に支援したらいいかということ、先ほど申し上げた、環境、それから支援機器、そして理解という形でこれからもお願いできればと思います。

ご静聴、ありがとうございました。